

日本語のポライトネス : 異文化理解教育の方法開発 に向けて

松村, 瑞子

<https://hdl.handle.net/2324/1398456>

出版情報 : 九州大学, 2013, 博士 (芸術工学), 論文博士
バージョン :
権利関係 :

氏名・(本籍・国籍)	まつむら よし こ 松村 瑞子 (広島県)
学位の種類	博士 (芸術工学)
学位記番号	芸博乙第27号
学位授与の日付	平成25年9月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文題目	日本語のポライトネス —異文化理解教育の方法開発に向けて—
論文調査委員	(主査) 教授 板橋 義三 (副査) 准教授 矢向 正人 教授 井上 奈良彦

論文内容の要旨

本論文は、日本語のポライトネスを題材として、異文化理解の教育方法論を提示した。先ず第2章で先行研究を概観し、本研究の立場を述べた。第3章では、この論文で使用したデータの種類および収集法についてまとめた。第4章以降が本論である。本論を2部に分け、第I部(第4章～第10章)では、理論編「談話分析に基づく日本語のポライトネス研究」と題して、様々の角度から日本語のポライトネスについて分析を行い、その特徴を明らかにしていった。第II部(第11章～第15章)は応用編「日本人の言語行動におけるポライトネス—効率的な日本語ポライトネス指導法を目指して—」である。依頼・勧誘と断り、謝罪、褒め、不平・不満・不同意表明、感謝という言語行動における日本語ポライトネスについての、日本語母語話者と日本語学習者の認識の違いを明らかにし、教授内容を特定することで、これらの言語行動における日本人のポライトネスを教授するために実践的教育法を提示した。本論文での教育方法を利用することで、異文化をもつ日本語学習者が日本文化に対する理解を深めていき、日本語教育の現場から多文化共生を目指すことを期待することができる。

第I部では、日本語教育の現場に還元することを目指して、様々の角度から日本語ポライトネスを考察していった。第4章では、日本語のスタイルの交替を分析することによって日本語のスタイルは初期条件によって固定化されるものではなくダイナミックに交替していていることを論じた。

第5章では、Brown and Levinson (以下 B&L) (1987) のポライトネス理論では日本語のポライトネスは十分には説明できないことを論じた。

第6章では、日本語のポライトネスにおける「わきまえ」の重要性を再確認した。3タイプに分類された12種類の会話を分析しながら、日本語においては、(1)「わきまえ」としてのポライトネスと、(2)「ストラテジー」としてのポライトネスがあり、日本語会話におけるポライトネスは、「わきまえ」を遵守しつつ多様な「ストラテジー」を使用するという複合的な方法によって実現されることを論じていった。

第7章では、先ず日本語と同様、韓国語・中国語のポライトネスにおいても「わきまえ」が重要な役割を果たしていることを述べた。次に、韓国人・中国人・台湾人が奇妙に感じた日本語のポライトネスの例を挙げながら、日本語のポライトネスと韓国語・中国語のポライトネスの類似点・相違点について論じていった。

第8章では、韓国人に対する日本語教育に生かすために、日本語と韓国語のポライトネスの対照研究を行った。日本人のポライトネスのうち韓国人が異なると感じるものをデータとして収集し、それが日本人と韓国人のどのような相違から起こるものであるかについて考察した。

第9章では、日本語配慮表現指導教材開発に向けて、10代～50代の日本人および中国人に対する日本語配慮表現に対するアンケートを基に、日本語配慮表現に対する認識の相違を明らかにした。

10代～50代の日本人および中国人に対するアンケートを基に、日本語の配慮表現に対する認識の相違を調査分析し、その相違を明らかにした。

第10章では、「聞き手志向」という観点から、日本語ポライトネスとは何かについて論じていった。日本語学習者にとって違和感のある日本語ポライトネスおよび日本人にとって違和感のある日本語学習者のポライトネスをデータとして、日本人と日本語学習者の意識の相違を特定し、「聞き手志向」の日本語ポライトネス指導教材開発に向けた考察を行った。

第II部では、日本語ポライトネス指導のための実践的教授法の提示を行った。第11章では、日本人と学習者の勧誘・依頼および断り方略に対する認識の相違を明らかにした上で、自然会話を素材とした効率的な日本語ポライトネス指導法を提示した。

第12章では、日本人と学習者の謝罪行為に対する認識の相違を示した上で、日本人の謝罪行為の効果的指導法とは何かを考察した。

第13章では、褒めの定義および先行研究を概観した後、先ず日本人の褒めの例を挙げながら、褒めに関連する文化差について考えていった。次に、日本人は褒めているつもりだが、誤解される可能性の大きい褒めを提示し、その教授法を示していった。

第14章では、学習者にとって最も困難な行為の一つである不平・不満・不同意の表明について論じていった。実際の会話において日本人がどのようなやり方で不同意を表明するかについて観察・分析することで、日本人の不同意表明について考察し、日本語学習者への教育方法を示した。

第15章では、感謝行為について論じた。先ず、日本人がどのような場面で感謝を期待しており、そのような場面で感謝が行われなかった場合どのように感じられるのかについて論じていった。次に、学習者が理解しにくい日本人の感謝表現を挙げながら、効果的な日本語教育方法を示した。

第16章は結論である。本論文の論点のまとめとして、本論文での教育方法を利用することで、日本語学習者が日本文化に対する理解を深めていき、日本語教育の現場から異文化理解を目指すことが期待できることを述べた後、今後の課題について述べた。

論文審査の結果の要旨

本論文は日本語におけるポライトネスの諸相を考察し、その分析結果を基にしてその日本語教育への応用方法を検討したものである。体系的なポライトネス研究は Brown & Levinson(1978, 1987) ‘Politeness’ が世界の先駆けとなっており、世界の言語のポライトネスを理論的に解明しようとする際にはこの著書が参照され普遍的理論として考えられてきた。しかしながら、その理論的枠組みやその理論の構成要素が日本語を本論分の中心に据えたアジアの言語には不適切であることを、独自に収録した実際の日本語の談話文を通して、具体的にかつ体系的に記述分析した。

本論文は全体で16章からなる。第1章から第3章までは予備的内容であり、第1章は序章であり、第2章で先行研究を概観した後、本論文における著者の立場を述べている。第3章は本論における談話データの種類および収集法を概説している。第4章から第10章までを第I部とし、理論編「談話分析に基づく日本語のポライトネス研究」と題して、様々な視座から日本語のポライトネスに関してその特徴を考察している。

第11章から第15章までを第II部、応用編「日本人の言語行動におけるポライトネス—効率的な日本語ポライトネス指導法を目指して—」として、指導方法に関して著者の開発成果を主に下地にして考察している。最後の第16章は結論としている。

第一部の理論編では、普遍的理論とされる Brown & Levinson (1987)の理論についての妥当性を、アジアの言語、特に日本語のポライトネスについて検討し、独自に収集した談話やテレビ番組の対談などをデータとして、この Brown & Levinson の理論の不備を論じている。具体的には、日本

語のポライトネスは対話者間の距離、親疎、上下関係、場面という条件に基づくパラメータで表現することができないことを指摘している。また、本論文のために収集された具体的な談話に基づいて、慣習的な「わきまえ」のポライトネスと、意図的な「ストラテジー」のポライトネスが複合的に絡み合っているという特徴を記述分析している。

第二部の応用編においては、依頼・勧誘と断り、謝罪、褒め、不平・不満・不同意表明、感謝といった言語行動における日本語ポライトネスについて、母語話者と東アジアの国々の日本語学習者の認識の相違を、アンケート調査や聞き取り調査を行った結果を通して実証した。また、その認識的相違を基に日本語教育における教授内容を見据えることにより、上記の言語行動における母語話者のポライトネスを教授するための、実践的に取り組む教育方法を提案している。

また、異文化理解教育という枠組みにおける教育学的観点からもポライトネス研究を進め、その言語教育学的観点を総合して日本語教育の現場への適用もはかった。

以上の点から、本論文は日本語教育の分野において、ポライトネス理論の基礎研究とその適用という観点から、日本語のポライトネス研究を飛躍的に前進させ、非常に優れた貢献をしたものである。よって、本論文は博士（芸術工学（乙））の学位論文に値すると論文調査員全員が判断した。